

日野原重明のサナトロロジー

要 旨

わが国で Death Education の普及に最も貢献している人と言えば、アルフォンス・デーケンと共に日野原重明を挙げなければならない。日野原は医者であり、プロテスタントの信者。現在八十歳を越える高齢でありながら、聖路加看護大学学長を務める。

彼のサナトロロジーはまず第一に、半世紀を越える内科医として、また「死の川の船頭」としての豊富な経験から生まれたものであるが、同時に患者から学ぶという姿勢、キリスト教の信仰、オスラー博士との出会い、文学の深い理解等に基づいている。そこで彼は、死から生を見ろという観点の必要性を説き、今日の青年には是非とも Death Education が必要であると考える。ターミナル・ケアでは、単なる延命よりも生命の質が、生の深さが必要であり、(死の受容)にあたっては信仰が最も重要な役割を果たすであろうと言う。生命の質の向上、信仰の必要性はまたわれわれの人生全体にも通じることである。

はじめに—日野原重明という人—

今日わが国で Death Education の普及について、最も精力的に活躍している人と言えば、アルフォンス・デーケンと共に日野原重明の

大 町 公

名を挙げなければならない。デーケンが神父であり、哲学者であるのに対し、日野原は医者であり、プロテスタントの信者である。現在八十歳を越える高齢でありながら、聖路加看護大学学長を務め、活発な講演活動、執筆活動に努めている。

かつて筆者は『死をどう生きたか』¹⁾に感銘を受け、日野原の他の著作を求めようとしたが、当時は『病む心とからだ』と『生の選択』²⁾しか手に入らなかった。その後時をおいて日野原の名を頻繁に耳にするようになり、今回彼のサナトロロジーを検討すべく、できるかぎりの著作をそろえてみたが、この十年に満たない期間の彼の活躍はまことに目覚ましい。ターミナル・ケアに、いや広く人間の死というものに、わが国においてもこの時期ようやく人々の目が向けられるようになってきたという点に關係していようが、これまでに蓄積されてきたものが一挙に堰を切って流れ出てきたような感がある。彼の高齢を考えるなら、できるだけ多くの人々に、急ぎ伝えておきたいことが山ほどあるに違いない。

日野原の略歴は、『死をどう生きたか』によれば「一九一一年(明治四四年)に生まれる。一九三七年、京都大学医学部卒業。聖路加国際病院内科医長、院長代理を経て、現在、聖路加看護大学学長。財団法人ライフプランニングセンター理事長。専攻、内科学・予防医学。」

とある。

日野原の仕事を理解するために、彼の著書からもう少し詳しく彼の足跡をたどってみることにしよう。父はプロテスタントの牧師。京都大学医学部二年の時、結核性肋膜炎で、療養のため一年二カ月間休学。一九四一年より、聖路加国際病院に勤務。一九四五年頃、アメリカ人の医師ウィリアム・オスラー（一八四九—一九一九）に関心をもち、アメリカ軍医よりもらった彼の講演集『平静の心』に深い感銘を受ける。一九五一年、アメリカ、アトランタに留学。一九五四年、聖路加国際病院に人間ドックを開設。一九七〇年、乗り合わせた航空機「よど号」が「日本赤軍」によりハイジャックされる。一九九三年、ライフプランニングセンターの事業として、かねてより計画していた独立型ホスピスが神奈川県に完成。

一、「死の河の船頭」

『死をどう生きたか—私の心に残る人びと—』は、「四十五年余の内科医としての生涯のなかで、私が主治医としてお世話し、逝くなった患者さんたちの数は六百人を越える。／＼そのなかで、その方々の死を通して、私が人間の生き方を教えられ、命の尊厳を印象づけられた十八名」を中心とする人達の「その生の終焉の真相」を書き綴ったものである。

「私の心にいつまでも忘れられずに残るこれらの患者さんたちを、私は、死の河の船頭として彼方の岸に送るなかで、これらの方々から、生とは何か、死とは何か、そして医学とは何かまでを学ばせていただいた。患者さんが生き、患者さんが死にゆくように、私も生き、死ぬものであるということ、実感をもって学んだ。その意味で、十六歳の少女も、九十五歳の禅学者も、ひとしく私の師であった。」と書く。ここには患者から学ぶという日野原の変わらぬ姿勢がある。本書には

彼のサナトロジの精髓が、以後の著作のすべてがあるように思える。

彼の著作は著者自身が認めているように、「話の中に引用する文献や事例はすでに活字になっているものと重複するものが少なくない」。一つの経験は、視点を換えれば、また新たな真実を語りかけてくれる。彼にとっては、汲めども尽きぬ泉のようなものである。拙論では、そのような、彼が繰り返し述べている事柄を中心に取り上げて行くことになるだろう。『死をどう生きたか』からそんな例を一つ挙げる。冒頭に置かれた「死を受容した十六歳の少女—担当医としての最初の「ハブニング」である。彼の著書の中で繰り返し繰り返し語られる。取り上げられる頻度、その取り上げられ方から推測しても、おそらく彼の医師としての生涯に最も大きく、また最も深い影響を与えたものだろう。

昭和十二年、大学卒業後最初に担当を命ぜられた患者のひとりが、十六歳の「女工」であった。病気は結核性肋膜炎。彼女は母親同様、熱心な仏教徒であった。父親はなく、家は貧しく、小学校を卒業するや、母とともに紡績工場に女工として働いていた。母親は入院費、生活費を稼ぐのに忙しく、娘の見舞いに来られるのは、せいぜい二週間に一度であった。

眼の大きい美しい少女であったが、腹痛と嘔気で食事がとれず、頬はそげ、目のまわりには隈さえ現われるようになった。病状が日に日に悪化して行く中、ある日少女はモルヒネの注射後、苦痛がやや和らいだのか、「大きな眼を開いて」、日野原にこう言った。

「先生、どうも長いあいだお世話になりました。日曜日にも先生にきていただいたてすみません。でも今日は、すっかりくたびれてしまいました。」

しばらく間をおいて、少女はこう続けた。

「私は、もうこれで死んでゆくような気がします。お母さんには会え

ないと思います。」

少女は少しの間眼を閉じ、再び眼を開いて、

「先生、お母さんには心配をかけたつづけて、申し訳なく思っていますので、先生からお母さんに、よろしく伝えてください。」と頼み、日野原に向って合掌したという。

若き日野原は「一方では弱くなつてゆく脈を気にしながら、死を容したこの少女の私への感謝と訣別の言葉に対して、どう答えていいかわからず」、さりとて「安心して死んでゆきなさい。」などとほども言えず、

「あなたの病気はまたよくなるのですよ。死んでゆくなんてことはないから元氣を出しなさい」と言った。「そのとたんに彼女の顔色が急に変わった」のである。あわてて治療しながら、日野原はもう一度少女の耳元で叫ぶ。「しっかりしなさい。死ぬなんてことはない。もうすぐお母さんが見えるから。」と。彼女は病状が一変したまま、回復することなく、永遠の眠りについた。

「なぜ私は、『安心して成仏しなさい』といわなかったのか？『お母さんには、あなたの気持ちを充分に伝えてあげますよ。』となぜいえなかったのか？そして私は脈をみるよりも、どうしてもっと彼女の手を握ってあげなかったのか？」

日野原はこの経験は何度も何度も、繰り返し繰り返し反芻するのである。その経験はターミナル・ケア、病名告知、生命の質、死の受容と信仰の問題等、医者として成熟するために実に豊かな糧となつてくれたであろうが、医学の無力、医者としての未熟さを思い知らされる痛恨の出来事でもあったろう。

二、死から生を見る

日野原のように戦前に育つた人にとって、人間が死ぬということ、

Man is mortal. ということは、教えられるまでもないことであつた。

人がよく死んだのである。彼によれば、当時は乳児の死亡率が高かつた上に、幼い子供も夏、疫痢にかかると、一週間の間にその四割は死んだ。結核性髄膜炎にかかると四週間で百パーセントが死んだ。結核で死ぬ若者達も多かつた。当時、男は戦争に行かねばならなかつた。親はそれを考慮し、何人もの子供を生んだ。女も出産の折、産褥熱で死ぬことがあつた。死は日常的なことだったのである。

現在はどうであらう。今の若い人達は死を知らない。いや若者だけではない。筆者も四十五歳になる今も両親が健在で（これ自体は幸いなことだが）、祖父母と同居したことがなく、従つて家庭で死者を出した経験がない。もちろん葬儀を行なつた経験もない。言わば死と縁のない生活を送つてきたのである。そういう人間にとって死を知ることとは実に難しい。

人は死を知らないばかりか、死を考えない。日野原は「人間には不思議なことがたくさんあると思いますが、最も不思議なことのひとつは、自分の末期のこと、何年か先には必ずくるであらうと思われる死をもあまり真剣には考えないということですよ。」と語る。

井上靖でさえも「父が丈夫でいる時、私は一度も自分の死を考えたことはなかつた。父でさえ生きていたのであるから、まだまだ自分というものは死から遠いと思つていた。父に死なれてみて、初めて私は父という一枚の屏風で死から遮られていたことを知つたのである。」と書いてゐる。父親より早く死なないという保証は何もないのだが、そういう根拠のない理由によつて、自分は死なないと決めてかかる。そう思い込むことが可能なのである。人間と他の動物の違いは多々あるが、重要なのは人間は自分が老い、死ぬことを知つてゐることである。他の動物は老いや死を予想して生きることができない。にもかかわらず、今日われわれは死を考えようとしくなつてゐるのである。

昨今、Death Education が必要とされる理由がここにある。シェイクスピアの言葉を借りれば、人間にとって「死はいわば必然の終結 necessary end、来るときには必ず来る」(福田恆存訳、『ジュリアス・シーザー』⁷⁾)。われわれは死について考えなければならぬ。いや、死を知らなければ、生が理解できないのである。死から生を見るという「逆転の発想」が必要なのである。日野原の「死から生を考える」、「死から生へ」、「死は生の一部」といった講演においては、まさにこの観点の必要性が強調されるのである。

日野原は医者であり、末期患者にどう対応すべきかについては医者としての豊富な経験がある。そういう話の際には主治医としての体験が突に適切に語られている。しかし、自らが死すべき存在であることを知る、あるいは理解する、この点については医学以外のものの手を借りなければならぬ。日野原は「人間の死についていろいろ考えるには、文学がもっとも私たちに教えてくれます。」⁸⁾と言っている。日野原が引用する文学者は数多いが、特にリルケ(一八七五—一九二六)とタゴール(一八六一—一九四一)の名を挙げなければならぬ。リルケでは『時禱集』より「神よ 各人に与えたまえ」と小説『マルテの手記』から引用されるが、まことに的を得た引用と言わざるをえない。

神よ おのおのの者に その者固有の死を与えたまえ、

おのおのの者が 愛と 一つの意識と そして自分の悲しみを発見した

この生の中から 各人の固有の死が ほんとうに生まれ出るように させたまえ。

(片山敏彦訳)⁹⁾

「巧みな手づくりの死に関心をもつ者があるだろうか? 以前には、ちょうど果実が自分の中に種子を包んでいるように、人間も自分の中に死……子供たちは小さな死を、大人たちは大きな死……を宿している点に、特別な威厳ともの静かな自負があった。」(大山定一訳)¹⁰⁾

人は生まれながらにして心の奥に、あたかも果実のように種を宿している。「死」という種子を胸に秘めているのである。成長と同時に、その種を育ててゆく。子供の時には小さな死、大人になれば大きな死。それぞれが胸深くで育てている死。それが「特別な威厳ともの静かな自負」を与えている。「生」とはそのような「固有の死」を、「愛と一つの意識とそして自分の悲しみ」の刻まれた「死」を育てること、「手づくりの死」を完成させることに他ならないというのがリルケの言いたいことであろう。

生きるということはいつても死を考えながら生きることであり、どのように生きるかということとは、どのように死ぬかということと言わば表裏になっている。人間の生というものはそのように考えねばならぬのである。

三、生きる」との質

旧約聖書に「われらのよわいは七十年にすぎません。あるいは健やかであつても八十年でしよう。」(詩篇九〇篇一〇節)とあるように、人はもともと七〇〜八〇歳の寿命が与えられている。生まれた時から、遺伝子によってそう決められているのである。医学の役割はできるかぎりこの寿命を全うさせることであつた。

プラトンは『ティマイオス』の中で、「本来の自然のあり方で起るものは快いもの……。そしてまさに『死』もまた同様、病氣や傷害によつてくるものは苦しく、不自然なものです。老いとともに、自然に終局に向かうものは、おおよそ、死の中でも、もっとも苦痛の少な

いもの、いや、苦痛よりも、むしろ快楽を伴うものなのです。」¹⁹と言う。長生きをすれば安楽な死、平和な死が待っている。そういう死は言わば自然の賜物であり、それを享受できることは老人の特権とも言えるものであった。

従来、医学のゴールは *to cure* と *to prolong a life*、つまり病気を治し、命を引き伸ばすことであった。医学はこのゴールにますます接近してきた。しかし三十年ほど前から、人々はこれとは別の三つ目のゴールがあることに気づき始めた。それは *to improve the quality of survival (or life)*、人間の生存の質を良くするということである。日野原の講演の題を借りれば「延命の医学から、生命を与えるケアへ」ということになる。生命の長さよりも生命の深さが、質が大切であるという考え方に変わってきたのである。

この点では日本の病院は欧米と比べてずいぶん遅れている。日野原は言う。

「痛みに耐えることを強いられ、点滴注射などによる行動の束縛、そして気管内挿管での酸素吸入で発語の自由さえ奪われ、『最後の言葉』を残せずに死んで行く人を見ると、これは人生最大の悲劇としか考えられない」²⁰。

to improve the quality of life、そのためには老人の晩期の生活に潤いと暖かき、生きがいを与え、生きる意義が感じられるように、病院や老人施設の構造や環境の改善をはからねばならない。直接的にはそういうことであろう。しかし「生きることの質」はもう少し広い意味でも使われているようだ。

日野原は『老いを創める』²¹他で、「年をとっていることは、はじめるといふことの意味を忘れていなければ、すばらしいことである。」(田口義弘訳)²²というマルチン・ブドパー(一八七八―一九六五)の言葉を何度も引用する。暦の上での年齢が高くても、理想を持ち、意

欲をもつてものごとを考え、計画し、何かをする。言い換えれば、新しくことを創(はじ)め、勇気を持ってやる人は老いてはいない、という意味である。「私たちのいのちの長さというのは、ただ長いことに意義があるのではなく、延ばされたいのちがどう使われているか、しかもどんな固有な使われ方をしているか否かが重要になってくるのです」²³。けだし、これは何も老年期に限られることではない。人生のいつの時代においてもわれわれの心がけねばならぬことである。

すでに述べた「固有の死」、「手づくりの死」ということも、「生きることの質」という観点を念頭に置いた生き方であろうが、他にも日野原がしばしば口にする言葉として「出会い」、「平静の心」、「与えること」(愛)などがある。それらについても触れておこう。

日野原は「人生は出会いである。」²⁴と言う。「人生というのは、この予期せざるさまさまの出会いを、どう私たちが受け止めるかということに集約されるかもしれません」²⁵とも言う。彼の場合、相手はまず患者であろうが、出会いは何も生きている人ばかりとは限らない。既に亡くなった文学者、哲学者との、彼らが書き残したものを通しての出会いということもある。日野原にはオスラー博士との出会い、またこれまで引用してきた数々の文学者、哲学者との出会いがあった。テニス(一八〇九―一八九二)も言うように、「現在の自分は、これまで出会ったものすべての贈物である。」(西前美己訳)²⁶

日野原はよく「感性」という言葉を使う。医者、看護婦は感性を高めねばならないと言う。人に共感し、書かれたものにも共感する。日野原自身、人に共感する能力といたものが人一倍高いと言うことができるであろう。いや、その高さを維持し、より一層高めるために日々努力していると言うべきであろう。人との出会いによって感性が豊かになると言う。そして、豊かになった感性が、よりよき出会いを用意するのである。

次に「平静の心」について。オスラーの講演集『エクアニミタス（平静の心）』は、彼がアメリカの医学生や看護婦を前に行なった講演集であるが、この本が日野原の生き方に「原則とシステム」を与えた。その教えを一言で言えば、人生を歩む中で一番必要なのは「心の平静」だということである。日野原はこれを三十四歳の時に初めて読んだ。「オスラーに出会わなければ、私は全く違った医師になつていたらと思います。」とまで言い切っている。

オスラーは学生とのある別れの席で、「ローマの名皇帝、かつ賢者として歴史に残るアントニウス・ピウスが死に際して、人生哲学を『平静』の一語に要約した。皇帝のこの世を去らんとする時の態度は、ちようどこれから世に出ようとする医学生諸君にとつても同じく望ましい態度である。平静は成功の時にも、失敗の時にも等しく大切である。不動、沈着はもともと天賦のものであるが、教育と訓練によって獲得することができる。」と話した。「平静」はその裏付けとして「忍耐」を要求する。平静であるためには、悲しみに耐え、苦悩を忍耐しなればならない。医学生は、いや単に医学生だけではないだろう、耐えることができる人間になれと言う。オスラーはエピクテトスからストア派の影響の強い人であった。ではそれはどのような忍耐なのか。この関連で引用される、まことに感動的な祈りがある。

神よ、

変えることのできるものについて、

それを変えただけの勇気をわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、

それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。

そして、

変えることのできるものと、変えることのできないものとを、

識別する知恵を与えたまえ。

（大木英夫訳）

この「冷静さを求める祈り」として有名なラインホルト・ニーバー（一八九二～一九七二）の言葉は、第二次世界大戦中、連合軍兵士へ送られたクリスマス・カードに印刷されたものである。ここに言う「冷静さ serenity」こそ、「平静の心」であり、忍耐を言わば不可欠な要素として伴っている。自らの「知恵」によって、「変えることのできないもの」と認められたら、「受け入れる」他ないとの忍耐が必要なのである。そして死もまた「変えることのできないもの」に属することは論をまたない。

同様に、「しなう心」を挙げなくてはならない。日野原が米國アトランタに留学した時以来の友人、東大医学部（解剖学）教授細川安（一九二二～一九六七）は胃ガンのため四十四歳の若さで亡くなったが、病床にあって絶品としか言えない詩を数多く作った。それらは『詩集 病者・花』としてまとめられているが、中でも忘れられないのは「しなう心」であろう。日野原もそれを何度も引用している。

苦痛のはげしい時こそ

しなやかな心を失うまい

やわらかにしなう心である

ふりつむ雪の重さを静かに受けとり

軟らかく身を締めつつ

春を待つ細い竹のしなやかさを思い浮べて

じっと苦しみに耐えてみよう

では、次に「与えること」に移ろう。日野原は一九七〇年、五十八

歳の時、「よど号」ハイジャック事件に遭遇したが、幸い無事生還した。日本人が経験した最初のハイジャックであり、日野原も命拾いの感が強く、以後「第二の人生」との実感を持った。「私の人生は、そこで少し方向を変えたといえましよう。私の人生は、私だけのために私がつくるのではないに、私のためではないことのために、もっと私を使わなければならないという気持ちがある自然に湧き上がってきたのです。」と言っている。先のテニソンの言葉にもあるように、自分に与えられた恵みを教え上げれば、曲がりなりにも与えてきたと言えるものより、はるかに多いのに驚かざるをえないのである。

「人間が生まれたのは何を受け何を与えるためか」と題した講演の中でも、人に与えることの重要性を指摘する。何らかの報いを期待して与えるのは、本当の意味で与えることにはならない。愛とは言えないのである。小見出しに「人生において大切なこと」とつけ、「自分の人生のなかで人から受けてばかりいるのではなく、自分の方から与えるということ、何を返していくのかをだんだん考えていかなければならない」と述べている。

この関連では、インドの詩人タゴールが引用される。彼は八十歳でこの世を去る三ヵ月前、「最後のうた」と題し、次のように書いているのである。

こんどのわたしの誕生日に わたしはいよいよ逝くだろう

わたしは 身近に友らを求める――

彼らの手のやさしい感触のうちに

世界の究極の愛のうちに

わたしは 人生最上の恵みをたずさえて行こう。

今日 わたしの頭陀袋は空っぽだ――

与えるべきすべてを

わたしは与えつくした。

その返礼に もしなにかがしかのものが――

いくらかの愛と いくらかの赦しが得られるなら、

わたしは それらのものをたずさえて行こう――

終焉の無言の祝祭へと

渡し舟を漕ぎ出すときに。

一九四一年五月六日の朝

(森本達雄訳)

「人生最上の恵み」とは、愛である。彼が逝く時には、友からの愛が欲しいと言っているのである。彼は自らの人生を振り返り、「与えるべきすべてを／……与えつくした」と言う。もはや「わたしの頭陀袋は空っぽだ」。「その返礼に もしなにかがしかのもの」、「いくらかの愛と いくらかの赦しが得られるなら」、「空っぽ」になった「頭陀袋」に入れ、それをたずさえて、おそらくは人生に満足して、死の川を渡ろうというのである。日野原はタゴールに対する深い尊敬の念を表しているが、リルケの「手づくりの死」とともにしばしば引用されるこの詩の描くところは、日野原の〈理想の最後〉と言ってもよいものだろう。

四、死の受容と信仰

〈理想の最後〉を迎えるには、しかし、大きな関門が待っている。それは死の受容という難関である。死の恐怖、死の不安の克服と言ってもいいだろう。死の恐怖、不安は『ハムレット』の次のせりふにも端的に表れている。

「このいやな人生の重荷をいったい誰が汗を流し、苦しみあえいで耐えていくのか、すべては死後の何かを恐れているからだ。まだ知られ

ていない国、その国境から、どの旅行者も永久に帰らない。これが自分の意志をくじき、われわれがその見知らぬ国へ旅立つよりもむしろ、このあさましい現世をじっとたえさせるものなのだ。」(大山俊一訳)²⁷⁾
ここに表れているのは、未知なるものへの不安、恐怖である。死は「まだ知られていない国」への旅立ちであり、その国からは誰も「永久に帰らない」。そのことがわれわれに死後を恐れざるをえなくさせている。死の受容を困難にさせるものは他にもあるが、未知なるものへの不安はその最も大きいもの一つであろう。

いったい人はどのようにして死を受容しているのか。ウィリアム・オスラーは、大部分の人間にとって、「死は誕生と同じように眠りであり、忘却である」と、先のプラトンとも符合するような考えを述べている。今から百年ほども前になるが、彼は五百人の臨床の研究で、「死に方と死に至る過程の感じ方の研究」を行なった。キューブラー・ロスの先駆けとなるような仕事である。「五百人のうち九十人が何らかの肉体的苦痛なり、訴えを見せ、十一人は精神的不安を表わし、二人がはつきりと怖がっており、一人は激しく悔やんでいた。」という結果であったが、それを彼はこう結論したのである。

「まったく死という恐ろしい役人は、人間を情容赦なくつかまえてくるのだが、ごくわずかの人がその無慈悲さを感じないのだ。自然の掟の厳しい施行も、大部分の人間にとっては慈悲深く行なわれることになるのであり、死は誕生と同じように眠りであり、忘却であるに過ぎないのである。」²⁸⁾

この臨床研究の詳細はわからないが、死にゆく人の年齢によって、言い換えれば人が人生のどの時点にいるかによって、死の受容の仕方大きく異なってくるのではないか。例えばまだ人生の入り口とも言える青年の場合についてはこうである。

「もし死が健康に恵まれた力強い青年を襲うことがあった場合、その

死は本当に強く悔やまれて残念なことである。しかし、ただ信仰のみが死を恵みとして受け入れさせる。」(P・タマルティ、『よき臨床医をめざして—全人的アプローチ』、日野原重明・塚本玲三訳)²⁹⁾

春秋に富む若者が突然の死を受容することができるのは、ただ信仰によってのみであると言う。では、他の者ならいかにして死を受容することができるのか。ここでも宗教が重要な役割を果たすのではないか。死はわれわれが受容しても、しなくてもやってくる。「必然の終結」であった。〈死の受容〉に関しては、論文「死の受容—宗教とのかかわりあい—」に詳しい。これは最初『岩波講座 転換期における人間』第九巻「宗教とは」に掲載されたもので、今回筆者が取り上げた著作の中では例外的に〈論文風〉に書かれている。内容にもやや硬いところがある。

「宗教が何であれ、それが功利的な手段として用いられず、純粋なものとしてある場合、信仰により魂が浄化されるというのは、命の現在性から永遠性への昇華のプロセスが心の中に体験されることだろうと思う。宗教の出発点としての人間の心は、畏怖、憧憬、威厳、永遠性などに向かい、また限りある命は限りなき存在への結びつきを祈念し、人と神との結びつきを祈る心の中に宗教が発生するものと思う。

人間が、限りある命を自覚し、死が近づいているのを意識する中で、有限の命の中に見えない永遠の命への連続性が期待できる人は、そのことにより、死の受容が可能になるのではないかと思う。」³⁰⁾

人間の心そのものが宗教の出発点である。心は「畏怖、憧憬、威厳、永遠性など」に向かい、「限りある命」である人間は「限りなき存在への結びつき」を祈念し、「人と神との結びつき」を祈るようになる。そのような「祈る心の中」に宗教が発生する。他の箇所でも、「宗教心が発生するということは、やはり、人間の無力感、とくに死に対して無力だということが大きなモメントになっていると思います。」³¹⁾と言

う。それゆえ病氣によって死が近づき、「限りある命を自覚し」、その「有限の命」の中に、「折る心」が生まれ、「見えない永遠の命への連続性」が期待できる人は、死の受容が可能となるのではないか。

日野原は抽象的な議論を好まず、自らのかけがえのない経験を大切にする。患者との「出会い」をこそ大事にするのである。日野原は論文「死の受容」の中で、「死を受容した患者さんの信仰の症例」として四つ挙げる。彼らは自らの信仰によって死を受容した。日野原はそう確信している。日野原は患者と共有した最も真剣な時間を疑うことができない、言い換えれば「死の川の船頭」として船人達を彼方の岸に送る際、彼らが死を受容していたことを疑うことができないということであろう。いずれも『死をどう生きたか』に詳しい。「工業技術院部長平田義次さん—癌の宣告を私に求めた人—」、「禅学者鈴木大拙の最後—刻々を大事にされた人—」、「癌とは告げられなかった福岡正一さん—司祭に真実をゆだねて—」、それにあの「十六歳の少女」である。日野原が死を受容した例として挙げた所以をば知っておく必要があろう。それらを略述する。

(1) 知人の紹介で、平田さんが日野原を訪れたのは戦後間もない昭和十二年、四十四歳の時であった。彼も牧師の子であり、キリスト者であった。日野原が診察すると癌が疑われ、入院して調べたところ、進行した胃癌が発見された。「潰瘍による癒着で胃の通過困難がある」という説明で開腹手術を行なったが、胃癌はかなり進行し、ほとんど手がつけられず、手術は短時間で終わった。平田さんはそのことに疑問を持ったのである。

退院一週間後、往診の依頼があり家を訪ねた。診療がすむと平田さんは、「ふとんの端に正座し、私をじっとみつめ、急にその両手で私の両方の前腕を握り、こう切り出したのである。

「先生、ほんとうのことをいってください。胃潰瘍ではなかったの

しょうねえ。胃癌だったのですか。」

日野原は答えることができない。

「私には子供がありませんし、もし癌だとすると、いちおうあのこととを整理し、一人になる家内に苦勞をさせないように、処理したいのです。先生、癌ではなかったのですか。」

「私を凝視されたそのうるんだ眼に、私は、真実でない言葉で答えることはできなくなってしまう」、日野原はありのままの病状を話すと、平田さんは「先生、ほんとうのことをいっていただいてあげがと。先生、癌でも私に最善の処置をつづけてください。」と言った。日野原が患者に癌を宣告した最初の例である。

夫人によれば、この往診後、平田さんは「人間が変わったように」「ひたむきな療養態度」をとったが、手術後三ヵ月あまりたった頃から病氣が急に進行し、程なく亡くなった。お葬式には所属教会よりも広いある教会を指示し、「父なる御神の招きたまえば／＼みもとに行く身をひきな留めそ」という繰り返しのある讚美歌をソロで歌ってはしよとの希望を述べていた。

(2) 鈴木大拙（一八七〇—一九六六）は九十歳を過ぎてからも『教行信証』の英訳にとりかかるなど仕事への意欲は衰えず、「たえず前進」と自らに号令をかけていた。当時、住まいは北鎌倉の東慶寺だった。秘書の岡村美穂子にも「九十歳にならんとわからんこともあるのだぞ、長生きをするものだぞ。」と言っていた。

大拙は九十五歳の時腸閉塞で、聖路加国際病院に緊急入院した。治療は緊急を要したが、鎌倉近辺に適当な病院がなく、やむなく主治医日野原の所に来ることになったのである。交通渋滞で予想外に時間がかかり、日野原が診察した時には既に病いは重篤であった。「病氣はずいぶん重いです。」と率直に述べ、「最善をつくしますよ。」と言うと、大拙はうなずき感謝の気持ちを示した。死の二時間前、日野原が

「お寺の要職の方々が心配して部屋の外で待っておられるのですが、お会いなさいですか」とたずねると、「誰にも会わなくてよい。一人でよい。」と答え、眼を閉じた。

大拙の「静かな死の受容」は、終始死の床に立ち会っていた岡村が、その夜東慶寺に弔問に訪れた哲学者西谷啓治に何気なく語ったという次の言葉にうかがわれる。

「先生がそこに動かずに横たわっていられたことが、生きていられることの続きのように思えて、生きている先生と死なれた先生の間、さほど大きな変化の起こったような気がしなかった。」

(3) デパート勤務の福岡さんは昭和五十五年、大腸癌のため聖路加国際病院で手術を受けた。手術の時機を逸したため、再発し一年後五十七歳で亡くなった。手術を担当した医者から病氣は「治りにくいクローン癌」とされ、術後は日野原が主治医として世話したが癌告知は行なっていなかった。福岡さんは中学時代に受洗していたが、その後教会から遠ざかっていた。日野原は気づかなかったのだが、福岡さんは自分が癌であることを知って、病院のチャペルの司祭に自ら面会を求め、会話を持った。

「私のことについて、一切、先生にお任せいたします。どうか総てをこの病院のチャペルで営んでください。お願いいたします。……このことは、まだ、家族には話していませんので、お含みおきいただきたいのです。」

司祭は「心の中をすっかり吐露された福岡さんは、とてもご満足の様子でした。」そして、「『末の娘も今年大学に入学しましたので、私はもう何の心配もありません』と、笑みをささえ浮かべて話しておられました。」と書いている。司祭は約束は自分「二人の胸の中に収め」、以後「二人だけの約束」には一切触れなかった。

主治医の全く知らないところで、患者は病名を知り、死を受容し、

聖職者を訪ね、死の心づもり、葬儀の準備までしていたのである。日野原は、「幼い時の入信が、死を前に彼の心を支える信仰心呼び起こしたものと思う。」と書いている。

おわりに

医者、それも半世紀以上にもわたる内科医の経験を持つ、自称「死の川の船頭」日野原重明が、「医の科学はこれほどに発達しても、人間の死には勝てません。そして医の科学だけでは人間の生涯の終焉には対応できません。いかなる近代医学をもってしても、人間の死の前に医学は全敗せざるを得ないのです。」²⁴⁾と云う。

人がその生涯を安らかに終えるのに医学だけで十分ではないなら、それこそ文学でも哲学でもあらゆるものの力を借りればよい。しかし最も大きな力となってくれるのは宗教であろう。「心の糧は何なのか、心を支えるものは何なのか……。私はそれを宗教であると思います」²⁵⁾。日野原は「いまや大きな宇宙の理のなかにあって、それ(科学と宗教)が共存しなくてはならない」と云うのである。

筆者はここまで、日野原が何度も引用し言及していることは残らず取り上げるといった方針でここまで進んできた。その目的だけはなんとか達することができたのではないか。リルケ、タゴール、オスラー、細川宏、聖書、……そして何よりも「十六歳の少女」を初めとする患者達。日野原のサナトロジーは彼らとの「出会い」によって生まれ来たものである。テニソンの言葉にもあったように、日野原は彼が「これまで出会ったものすべての贈物である」²⁶⁾。それらのものが集まって、彼の感性と絡み合い融合して、日野原重明という一個の獨創性を織り上げたのである。内科医日野原において、その獨創性は患者一人一人への対応にこそ最もよく表れたであろう。

引用したかったが、本文にうまくはめこめなかったものに、フランスの哲学者メーン・ド・ピラン（二七六六—一八二四）の「健康は我々を我々の外の事物に連れ行き、病気は我々を我々の内に連れ戻す」がある。日野原は大学時代に結核性肋膜炎を患った時の経験を大切に、「私が長期の病気をやっていたいなければ患者の痛みがいまのようににはわからなかったでしょう。」と語り、回診の時、長期療養の若者に経験者でなければ言えないような励ましを言葉でかけるのを常とした。日野原もそうであったように、病気の期間はまた人が成熟するための時間でもある。ピランも言うように、病気は人間の目を内側へ向け、内省を促し、内面の充実をもたらすのである。日野原に「死に向かって成熟する」という題の講演がある。死の瞑想もまた人を成熟させる。人間は死の一瞬まで成長することができるのである。人間の死はプラトーンが言ったように、またオスラーも言うように、多くの人にとっては安らかなものである。しかし、たとえ運悪く人生の半ばで倒れるようなことがあっても、人間には宗教がある。四人の例で示されたように、彼らは信仰によって死を受容することができた。日野原のサナトロジーは、そういう人間の可能性を、いや「神」の被造物としての人間そのものを信じたサナトロジーである。

キリスト者日野原は『聖書』を引用して警告する。死の準備をしないさい。言い換えれば、もつと充実した、質の高い生を心がけなさいと。「十人のおとめ」のたとえで有名な「マタイ伝」第二章から「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」また、「テサロニケ人への第一の手紙」五章から「盗人が夜やって来るように、主の日は来る」を引用する。また、彼自身の言葉でも、「実際、死は突然やってきます。」「みなさんの想像よりも、人はその手前で死んでしまうのです。死は予想よりも早くくる。」と。「人生の四季に生きる」の最後に、晩期の理想が次のように描かれて

いる。日野原のサナトロジーの特徴が簡潔に現れているように思う。引用して拙論を終ることにしたい。

「さて、私たちに、いよいよこの世を去らなければならない日が来た時、タゴールが『人生の終焉』の詩に歌ったように、『わたしの頭陀袋は空っぽだ。—与えるべきすべてを与えつくした』……といえるでしょうか。もし、そうならば、ローマの詩人、ユヴェナリス（五〇—一三〇）が歌ったように（『風刺詩』、第十歌）、『人生の最後を自然の賜物として受け取る心』が私たちに与えられて、私たちは死の川を心静かに渡ることをできましょう。私たちは、哲学者マルチン・ブーバーにならって、創めることを忘れない老人となって生きたい、そして、どんなに激しい波風の中にも平静に生き、そして、人生の最期を自然の賜物として静かに受け取るよう、生涯を通して学び続けたいと思います。」

注

(1) 中公新書、一九八三年

(2) どちらも日本YMCA同盟出版部発行。『病む心とからだ』は一九五八年、『生の選択』は一九八一年刊

(3) 筆者が目にした彼のここ十年の著作は次のようなものである。

著書

『死をどう生きたか—私の心に残る人びと—』（中公新書、一九八三年三月）

『老いを創める』（朝日新聞社、一九八五年三月）

『健やかないのちのデザイン』（春秋社、一九八六年十月）

『老いと死の受容』（春秋社、一九八七年三月）

『人生の四季に生きる』（岩波書店、一九八七年六月）

『いのちの終末をどう生きるか』（春秋社、一九八七年七月）

- 『「いやし」の技のパフォーマンス』（春秋社、一九八九年七月）
- 『いのちの器—人生を自分らしく生きる—』（主婦の友社、一九八九年十月）
- 『生と死に希望と支えを—全人的医療五十年に想う—』（婦人画報社、一九九〇年六月）
- 『命をみつめて』（岩波書店、一九九一年二月）
- 『医学するところ—オスラー博士の生涯—』（岩波書店、一九九二年二月再刊）
- 『心とからだの健康設計—人生の午後に立って—』（日本経済新聞社、一九九一年三月）
- 『病むことと暮らすこと』（日本基督教団出版局、一九九一年十月）
- 『生きることの質』（岩波書店、一九九三年五月）
- 『看とりの愛』（春秋社、一九九四年四月）
- 編著
- 『死生学 第一集』（山本俊一と共編）（技術出版、一九八八年五月）
- 『死生学 第二集』（山本俊一と共編）（技術出版、一九八九年六月）
- 『死生学 第三集』（山本俊一と共編）（技術出版、一九九〇年十一月）
- （4）『死をどう生きたか』、i頁
- （5）同書、ii頁
- （6）同書、二～一一頁
- （7）『老いと死の受容』、一六一頁
- （8）『命をみつめて』、四二頁
- （9）同書、五九頁
- （10）同書、四一頁
- （11）同書、一五四頁
- （12）同書、一五五～一五六頁。

- 概して日野原の引用には正確さが欠けている。同じ人の同じ部分の引用であるにもかかわらず、相違していることがよくある。日野原の記憶の中で徐々に改変されてゆくのであろう。講演ということもあろうが、著者はその点にこだわっていないようだ。そういうことから、引用された箇所については、いちいち原典に当たらなかつたが、リルケのこれに關しては原典に当たり、もう少し長めの引用をさせていた。筆者も高校時代にかじっているにもかかわらず、初めて読むような感じがする。それほどまですに印象深い。日野原が読んだのは、大山の旧訳であろうか。現在の新潮文庫（大山定一訳、昭和二八年。昭和四一年改版）から引用する。
- 「入念な死に方など、もう今日の時勢では一文の価値もなくなつてしまつている。誰一人そんなことを考えるものもないのだ。いざ死ぬにしても、それを入念に準備するだけの十分に余裕を持つた富裕な人々すら、だんだん物具になり冷淡になり始めた。自分だけの特別な死に方をしようというような望みは、いつとなしに薄れてしまった。やがて、自分だけの死に方も、自分だけの生き方と同じように、この世の中から跡を絶つたろう。何もかもがレディー・メードになつてゆく。」
- 「昔は誰でも、果肉の中に核があるように、人間はみな死が自分の体の中に宿っているのを知っていた。（いや、ほのかに感じていただけかも知れぬ。）子供には小さな子供の死、大人には大きな大人の死。婦人たちはお腹の中にそれを持っていたし、男たちは隆起した胸の中にそれを入れていた。とにかく『死』をみんなが持っていたのだ。それが彼らに不思議な威厳と静かな誇りを与えていた。」（二四～一五頁）
- （13）『生きることの質』、八七頁
- （14）同書、六頁
- （15）『人生の四季に生きる』、一八二頁
- （16）『生きることの質』、四五頁
- （17）同書、九五頁
- （18）『いのちの終末をどう生きるか』、三一頁

- (19) 『鑑やかないのちのデザイン』、一四三頁
(20) 同書、一四七～一四八頁
(21) 『生きることの質』、一三三～一三四頁
(22) 『いのちの終末をどう生きるか』、一七〇頁
(23) 『生きることの質』、九二頁
(24) 『命をみつめて』、二〇頁
(25) 同書、二〇～二二頁
(26) 同書、一七四頁
(27) 『いのちの終末をどう生きるか』、一七八頁
(28) 『命をみつめて』、四五頁
(29) 同書、一七七～一七八頁
(30) 同書、一二〇頁
(31) 『死をどう生きたか』、七八～八六頁、一五五～一六二頁、一六三～
六九頁
(32) 『生きることの質』、一一二頁
(33) 『命をみつめて』、一三六頁
(34) 同書、一三六頁
(35) 『人生の四季に生きる』、一一四頁
(36) 『鑑やかないのちのデザイン』、一〇四頁
(37) 『命をみつめて』、三八頁
(38) 『人生の四季に生きる』、二〇二頁

Thanatologie de Shigeaki HINOHARA

Isao OMACHI

Résumé

Ce sont Alfons DEEKEN et aussi Shigeaki HINOHARA qui contribuent le plus à la diffusion de l'éducation de la mort au Japon. HINOHARA est médecin et protestant. Bien qu'il ait maintenant plus de quatre-vingts ans, il est président de l'université des Infirmières de Saint-Luc.

Sa thanatologie est née, d'abord, de plus d'un demi-siècle d'expérience comme médecin, et fondée sur la manière d'apprendre par des malades, la foi du christianisme, la rencontre de docteur Osler et la compréhension profonde de la littérature. Dans sa thanatologie il dit qu'il est nécessaire d'avoir un point de vue pour observer la vie par la mort, et que les jeunes gens ont besoin d'une éducation concernant la mort. A l'égard des soins terminaux, ce qui est important c'est la qualité, c'est-à-dire la profondeur de la vie plutôt que sa simple prolongation. A l'occasion de l'acceptation de la mort, la foi jouera le rôle le plus important. Et ceci, n'est pas seulement au moment de la mort, mais correspond aussi à la vie entière.